

## ミュージアムをめぐる日本とイギリスのつながり

川口 幸也 (かわぐち ゆきや)

本館文化資源研究センター



ヴィクトリア&amp;アルバート美術館／イギリス

でもっとも新しくなったサウス・ケンジントン博物館であった。関秀夫の『博物館の誕生』によれば、実際に町田が見た同館は、博覧会の仮設施設をそのまま常設に変えたものだったというが、帰国後、明治新政府の文教政策に携わることになった町田は博物館の実現に奔走する。

会場で、V & A から出品されている作品の前に立ち、ミュージアムをめぐる日本とイギリスのつながりに思いをはせてみるのも、「アジアとヨーロッパの肖像」展の楽しみ方のひとつかもしれない。

この秋の特別展「アジアとヨーロッパの肖像」展では、ロンドンのヴィクトリア&アルバート美術館(以下V&A)から計一四点を借用する。そこにはアジア、ヨーロッパそれぞれの貴重な陶磁器や清朝時代の祖先像などが含まれている。

V & A は、ロンドンの西郊、サウス・ケンジントン駅から歩いておよそ一〇分のところに、大英博物館から枝わかれした自然史博物館と踵を接して建っている。皇太子夫妻の居城があるケンジントン・パークからもほど近い。

一八五一年のロンドン万博の展示品を基に、翌一八五二年に産業博物館としてオープンした同館は、その後、一八五七年に現在の場所に移ってサウス・ケンジントン博物館と名を改め、さらに一八九九年に今の名称になった。ちなみにヴィクトリア&アルバートというのは、当時の女王とその夫君の名前に由来する。世界じゅうから集められた膨大なコレクションは、もっぱらアートとデザインを対象領域を絞っており、絵画、彫刻から陶磁器、

写真、家具、ファッション、ガラス細工、宝石、金属細工、織物に至るまで多岐にわたっている。余談だが、近年ではレストラン、カフェ、シヨップも充実していて見逃せない。

日本で最初の博物館は、ご存じのように東京上野の東京国立博物館だが、その淵源は一八七二年に湯島聖堂大成殿で開かれた博覧会だとされ、これが一八七七年上野の寛永寺本坊跡地でおこなわれた第一回内国勸業博覧会などを経て、やがて帝国博物館の誕生(一八八九年)へとつながっていく。ところが、この日本で初の博物館の直接のモデルとなったのがじつはV & A だったという話はあまり知られていない。鍵を握るのは、日本の博物館草創期の功労者で、東京国立博物館の事実上の初代館長と認定されている町田久成である。

町田は、薩摩藩の留學生の一人として幕末の一八六五年から一八六七年にかけてロンドンに学んだ。このとき、彼の心をとらえたのがパリ万博とそのころヨーロッパ

日本の陶磁器の常設展示



ラファエロ・ギャラリー



美術館の正面



企画展示では現代のファッションも採りあげる

